日本語助詞「は」と遊離数量詞の関係

石　井　隆　之

要旨　遊離数量詞の統語的振る舞いについて、日本語助詞の「が」を含む最大投射範疇 PP の認可に対しては、石井（2007）の照合理論の枠組みで、ある程度の説明が可能であるが、「は」を含む PP に対しては、原理的説明が難しい。例えば、「男が3人入ってきた」が文法的なのに対し、「男は3人入ってきた」が少し不自然であることが説明しにくい。そこで、本稿では遊離数量詞の基底生成位置と、その遊離数量詞の付加部移動や PP 内移動の仕組みを提案し、この問題の解決を試みた。その結果、「は」句の統語的振る舞いのみならず、「を」句前置構文で、遊離数量詞が、その先行詞から別の句を跨いで離れた文の文法性をも正しく予想されることが分かった。

キーワード：生成文法、遊離数量詞、照合理論、基底生成、付加部移動

The Relations of the Japanese Particle "Wa" to Floating Quantifiers

Takayuki Ishii

Abstract　As for the syntactic behavior of floating quantifiers, a satisfying explanation may be given to some extent to the licensing of the maximal projection PP containing the Japanese particle "Ga" by the Checking theory under the framework of Ishii (2007); however, it is hard to give a principled explanation to the licensing of a PP containing "Wa." For instance, it is difficult to explain why the sentence "Otoko-wa 3-nin haittekita" is a bit strange in contrast with the fact of another sentence "Otoko-ga 3-nin haittekita" being grammatical. To solve the problem at issue, in this paper, we clarified positions for the base generation of floating quantifiers and proposed the mechanism of adjunct movements and PP-internal movements. As a result, we have found that under the proposed theory, we can correctly predict the grammaticality of a sentence with another phrase between a floating quantifier and its antecedent in "Wo" -phrase preposing, not to mention the licensing of the syntactic behavior of "Wa" phrases.

Keywords: Generative grammar, Floating quantifier, Checking theory, Base generation, Adjunct movement

0.　はじめに

日本語における数量詞は、不思議な統語現象を示す。幾つか例を挙げてみる。

(1) a．３人の男が入ってきた。

b．３人男が入ってきた。

c．男３人が入ってきた。

d．男が３人入ってきた。

「３人の」という数量詞は「男」を修飾している［＝(1a)］が、「の」という助詞を取り去っても文は成立する。

(1b)では「３人」が「男」の前、(1c)では「３人」が「男」の後、(1d)では「３人」が「が」の後に来ている。このように「３人」が助詞「の」から独立して、自由に移動しているとき、この「３人」は遊離数量詞と呼ばれる。(1b-c)に見られるように、遊離数量詞を用いた文も、遊離しない数量詞の例［＝(1a)］と同様、文法的である。

しかしながら、次の例ではその様相が一変する(1)。

(2) a．３人の男は入ってきた。

b．??３人男は入ってきた(2)。

c．??男３人は入ってきた(3)。

d．?男は３人入ってきた(4)。

つまり、格助詞「が」が副助詞「は」に置き換えた途端、文法性に差が出るのである。

以上見てきたように、日本語助詞「が」と「は」では、遊離数量詞の振る舞いに微妙な容認度の差があることが認められるが、これは何故であるかという問題に、生成文法の立場から、１つの解答を提示するのが本稿の目的である。

1.　従来の解決法に関する考察

1.1.　相互 c 統御による説明

池内（2005）では、次の制約によって、遊離数量詞（英語では Floating Quantifier：以後 FQ と呼ぶ）の統語的振る舞いを説明している。

---

(1)　これは、言語学の知識はないが、教養のある日本語のネイティブ１人に、一気に発音された(2a-d)文が、文脈を考えなくても自然かどうかをチェックした結果のデータである。これは、筆者の直感とも一致する。但し、統計的な信頼性はない。このデータは、ネイティブの直感を科学するという理論言語学的手法の結果であることを付記しておく。

(2)　「３人男」は、「３人」「男」の間に小さなポーズを入れると、ほぼ文法的になる。

(3)　「が」を入れた形は容認され、更に「は」と「が」が逆の場合は非文法的である。

(i)　男が３人は入ってきた。

(ii)　*男は３人が入ってきた。

(4)　話題化の構文ではなく、対比の文脈では、自然である。

(i)　女は５人、男は３人、入ってきた。

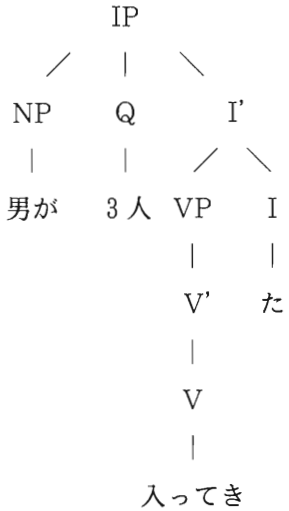
また、この文脈では格助詞「が」も不自然ではない。

(ii)　女が５人、男が３人、入ってきた。

(3) FQ とそれが修飾する NP（＝先行詞）またはその痕跡が相互 c 統御（mutual c-command）していなければならない。

(3)の条件により、(1d)が説明可能である。

(4)

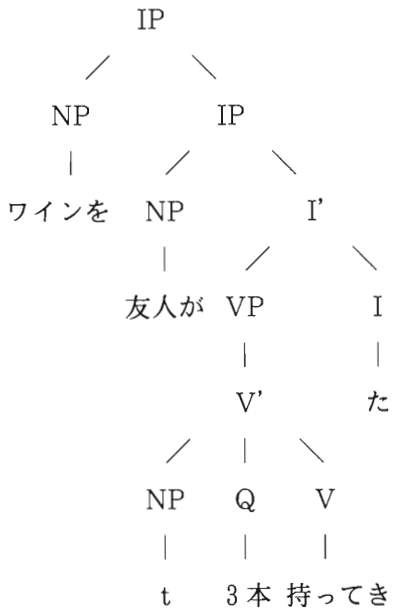


また、相互 c 統御により、次の文の文法性が説明できる点が特徴である。

(5)ワインを友人が 3 本持ってきた。

(5)の構造式は、(6)で示される。

(6)

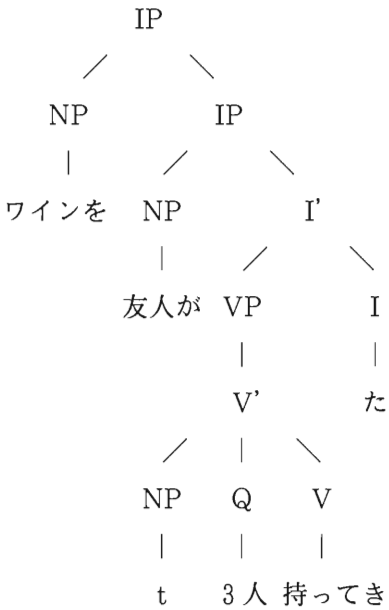


(6)において、「ワイン」の痕跡 t が FQ（3 本）と相互 c 統御しているので、(3)を満たし、この文は文法的と判断され、事実に合致する。

さらに、(7)の非文法性も説明可能である。(7)の構造は(8)である。

(7)*ワインを友人が 3 人持ってきた。

(8)



(8)において「友人」の FQ（３人）が「友人」をｃ統御していないので、(3)の条件に違反し、正しく非文法性を説明するからである。

しかし、これらは全て「が」の場合であって、「は」を用いた場合の解決法は示されていない。例えば、(5)文の「が」を「は」に変えた場合は、不自然であるが、これをどう説明するかは示されていない。

(9)?*ワインを友人は３本持ってきた。

(9)文を説明できないのであるから、当然、(2a-d)を説明できない。さらに、相互ｃ統御説では、(1a-c)さえ、説明できない。このうち、(1a)は FQ を使用しない文であるから、説明責任はないとしても、(1b)と(1c)は説明できない。というのは、池内（2005）には、「３人男」や「男３人」の統語構造が提示されていないからである。

1.2.　石井（2007）における照合理論

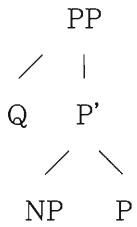
1.2.1.　数量詞を含む PP の構造式の提案

1.2.1.1.　「Q＋NP」の構造

1.1.で考察した「相互ｃ統御による説明」には限界があったので、石井（2007）は、(1a)文における Q（＝FQ でない「非遊離数量詞」をこのように表す）と NP の統語上の位置および、(1b-d)文の FQ と NP の統語上の位置を提案して、解決を図っている。まず、石井（2007）における「Q＋NP」の構造は(10)のようになっている[5]。

(5)　日本語の助詞は、英語における前置詞と機能が殆ど同じなので、本稿では Postpositional Phrase を形成すると考え、それゆえ助詞句は、英語の場合と偶然同じになるが、PP とする。

(10)



1.2.1.2.　「FQ＋NP」と「NP＋FQ」の構造

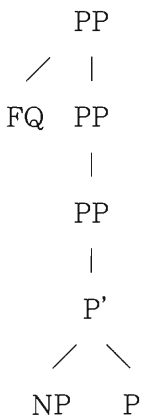
「３人の男」に対して、「３人男」、さらに「男３人」の構造は、石井（2007）では(11)のような説明をして、一般構造を(12)および(13)のように提示している。なお、石井（2007）では例文が異なり、「男」の部分が「友人」になっている。

(11)一般構造式提案理由

まず、「３人友人」における「３人」の位置は、「３人の」の位置、即ち、PP 指定部ではないと思われる。「３人」は FQ と考えられるからである。また、「３人友人」という表現において、「３人」と「友人」の間にポーズがあるので、この FQ と関係 NP の統語的距離は、少し離れていると予測できる。さらに、「友人３人」の場合、「３人友人」より若干自然なので、この表現における NP と FQ 間の統語的距離は、「３人友人」の場合よりも、近いと考えられる。［表記上、一部修正］

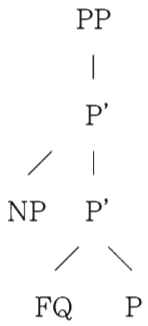
(12) a．〈FQ＋NP＋P〉の形

b．



⑬ａ．〈NP＋FQ＋P〉の形

ｂ．



1.2.1.3.　「NP＋Ｐ＋FQ」の構造

最後に石井（2007）では、「友人が３人」や「ワインを３本」の表現の構造を考察している。まず、「ワインを」と「３本」は切り離せるという⒁文を提示し、⒂のような説明を施して、⒃の一般構造式を提案している。

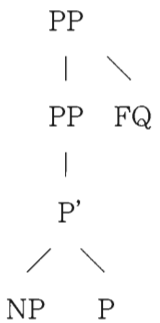
⒁ａ．友人がワインを３本持ってきた。

ｂ．ワインを友人が３本持ってきた。

⒂一般構造式の提案理由［番号は本稿に合うように修正］

⒁において、(14a)が基本形なので、(14b)の「ワインを」は(14a)から移動されたものであると考えてよい。移動するのは最大投射範疇（この場合 FQ を含まない PP）なので、「ワインを３本」という表現における「３本」は PP に付加された（つまり、PP 付加部に代入されたのではない）構造（＝付加構造）を持っていると考えられる。

⒃



1.2.2.　石井（2007）における〈NP＝FQ 照合理論〉の提案

1.2.2.1.　照合子条件

一般的に、ある文において、単語の配列上先頭に来る要素が、統語上上位に来る。英語も日本語も表記上、左から右へ文が流れるので、左上の法則（左の要素が右の要素よりも統語上上位であるという考え方）が成立する。

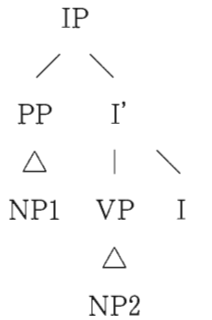
さらに、通例、ある文における２つの要素ＸとＹがあった場合、Ｘに対してＹが正しいかどうかは、ＸがＹを照合する（check）ということによって検証できると考えてよい。その場合、照合する要素Ｘを照合子（checker)、照合される要素Ｙを被照合子（checkee）と呼ぶ。

石井（2007）では、ある NP に対する FQ の認可の方法をテーマとしているので、NP が照合子になる可能性を持ち、FQ は被照合子となると考えることができるとしている。

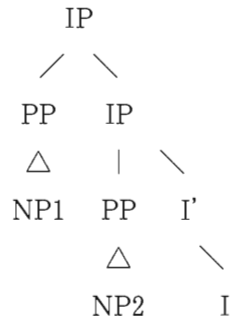
そして、一般的に、次のような図式において、高位の NP1（左側）が FQ を照合する照合子となり、もし、NP1 による照合が不可能ならば、低位の NP2 が同じ FQ を照合する照合子となると仮定することができるとしている。

なぜなら、高位の範疇が低位の範疇よりも優先されると考えるのが自然だからである。

⑰ａ．



ｂ．



(17a)は通常の構造であるが、(17b)の構造は、付加構造である。⑰の両構造において、まず、NP1 が優先的に照合子になる可能性を持つと石井（2007）は主張している。そして、NP が照合子になる条件、即ち、「照合子条件」を提案している。照合子条件とは⒅のような条件である。

⒅照合子条件

NP とその NP の照合対象の FQ の間の経路数が 6 以下であれば、NP は照合子となる(6)。

1.2.2.2.　照合条件

1.2.2.1. で述べた「照合子条件」を満たした NP が照合子となるわけであるが、照合の結果は、その構造が文法的かどうかを決定する、即ち、文法性の認可に関わることが「照合」(checking）に他ならない。

「照合条件」(照合により、どのように文法性に関する制約、つまり、どういう条件の下、文法的であるといえるかということ）を提案する前に、本稿における「同一指標」の拡大

(6)　⒅は、上位 NP と FQ の間の経路数が、6 以下であれば照合子となるということを示しているが、これは、逆に言うと、6 を超える経路数、即ち、7 以上の経路数がある場合は、上位 NP は、照合子とならないこと、つまり、その場合は、下位 NP が同 FQ の照合子となる可能性があるということを意味する。

解釈を提案する。

⑲同一指標の拡大解釈

NP を先行詞とする FQ には NP と同じ指標が振られる(7)。

石井（2007）では、⑲の提案の下、⑳の「照合条件」を提案している。

⑳照合条件

照合子 NP と被照合子 FQ に同一指標が振られている場合のみ NP と FQ の構造が認可される。

⑳により、照合が行われたとき、照合される FQ が照合子と同一指標が振られていない限り、その構造は非文法的になるということである。

1.3.　照合理論における若干の不備

1.2. で石井（2007）の骨子を説明したが、同論文による照合理論で、(1a-d)は説明可能である（その意味では、「相互 c 統御説」の弱点を克服している）が、(2b-d)は説明不可能である(8)。

というのは、(1b-d)文の「が」を、「は」と置き換えると、文法性が異なるからである。石井（2007）の枠組みでは、助詞の違いによる文法性の差を説明できないのである。

そこで、日本語助詞の「は」と「が」の基底生成位置と、FQ の基底生成位置を提案し、更に、FQ の「付加部移動」と「PP 内移動」の 2 つを提案し、石井（2007）の〈NP＝FQ 照合理論〉を若干改訂することにしたい。

2.　日本語助詞「が」と「は」と遊離数量詞の基底生成位置の提案

2.1.　日本語助詞「が」と「は」の統語的位置

2.1.1.　日本語助詞「が」の構造

日本語助詞「が」は、格助詞で主格を表すので、最大投射範疇 PP の主要部と考えてよい。そして、この PP は IP の指定部に基底生成するものと考えられる。なぜなら、主格の範疇は、IP 指定部に生じるからである。

スペースの節約のため、横書き樹形図で示すと、㉑のようになる。

---

(7)　⑲によると、次のような同一指標関係（＝同じ指標を振れる関係）が成立する。
　(i)　3人 i の男 i が入ってきた。
　(ii)　3人 i 男 i が入ってきた。
　(iii)　男 i 3人 i が入ってきた。
　(iv)　男 i が 3人 i 入ってきた。

(8)　(2a)文には、非遊離数量詞が現れており、これは、石井（2007）で説明可能である。

(21)格助詞「が」の基底生成位置

NP — P' — PP — IP
　　|
　　が

2.1.2.　日本語助詞「は」の構造

日本語助詞「は」は副助詞と呼ばれ、「主格」だけではなく、（辞書分類上）「対格」も表せる(9)。

(22) a．彼女はみかんを食べた。[主格を示す]

　　b．みかんは彼女が食べた。[対格を示す]

従って、「は」の統語上の位置は、主語位置（IP 指定部）よりも高いと考えられる。

また、次のような観察から、CP 指定部よりも統語的に高いと思われる。

(23) a．彼女はいつみかんを食べたの。

　　b．いつ彼女がみかんを食べたの。

　　c．?いつ彼女はみかんを食べたの(10)。

　　d．?彼女がいつみかんを食べたの(11)。

「は」句（=「は」を用いた句［例えば「彼女は」］）は、CP に付加されていると考えてよいので、本稿では「は」を巡る構造は、(24)となるものと提案する。

(24)副助詞「は」の基底生成位置(12)

NP — P' — PP — CP — CP — C' — C
　　|　　　　　　　　　　|
　　は　　　　　　　　　IP

2.2.　FQ の統語的位置

いかなる要素も統語上、基本的位置があると発想することは非論理的ではない。従って、FQ も、その基本的位置、即ち、基底生成位置があるものと考えてよい。次の文の観察から、FQ の基底生成位置は 2 箇所あると考えられる。

---

(9)「が」が主格を表すのに対し、「は」は主題（＝トピック）を表すと考えられる。

(10)（2a-d)の場合と同じインフォーマントによる。(23a)と比べた場合の容認度で、かなり微妙であるかもしれない。筆者自身は、この判断に従う。

(11)「彼女がいつみかんを食べたというの」という文の場合、全く自然な文となる。

(12)　C の部分は、疑問を表す終助詞「か」や「の」、または、節を接続する機能を持つ「と」などが来る。(23a)文を感嘆に分析してみると次のようになる。

(i)　彼女 — P' — PP — CP — CP — C' — の
　　|　　　　　　|　　|
　　は　　　　いつ　IP（＝みかんを食べた）

(25) a．3人来た。[「3人」は主語位置]

b．3個食べた。[「3個」は目的語位置]

「3人」などの遊離数量詞は、「3人が」「3人を」の2種類の最大投射範疇（PP）から、遊離するのが通例で、それ以外の「と」や「から」など、その他の助詞と結びついた場合は、完全な遊離は見られない。

(26) a．友人が3人来た。

b．みかんを3個食べた。

(27) a．私は友人3人と来た。

b．*私は友人と3人来た。

(26)(27)の観察は、FQの基底生成位置が2箇所しかないことを暗示する。本稿では、その基底生成位置は(28)であると提案する。

(28) a．主語位置のFQの基底生成位置

```
NP — P' — PP — IP
           |
           FQ
```

b．目的語位置のFQの基底生成位置

```
      VP —  V' — V
            |
NP — P' — PP — FQ
```

3.　FQの付加部移動とPP内移動の提案

3.1.　FQの付加部移動

本稿では、付加部移動という考え方を提唱したい(13)。

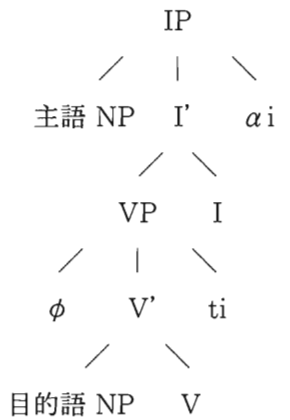
付加部移動とは、(29)のような移動を言う。樹形図は日本語をモデルとしている。

(13)　生成文法理論では、「主要部移動」という原理が存在する。例えば、疑問文生成におけるdoがIP主要部からCP主要部へ移動する現象が、それに値する。

(i)　a．What did you eat? の構造

```
b．CP — C' — IP — I' — VP — V' — tj
     |     |     |    |          |
  Whatj didi  you  ti          eat
```

(29)付加部移動



(29)においては、VP 付加部からαが IP 付加部に移動している。このような移動を FQ は行う能力があると仮定するのである。

これは、石井（2007）の説明の不備が、その証拠となっている。具体的に考察する。石井（2007）の p.54 に、「ワインを友人が 3 人持ってきた」が不可である理由を説明する図式を用いて、「ワインを友人が 3 本持ってきた」が正しい理由を説明している。

(30) a. *ワインを友人が 3 人持ってきた。

b. ワイン j — P' — PP — IP — IP — I' — た
を　PP — PP　VP — V' — 持ってき
友人 i — P'　3 人 i　t
が

そして、説明は次のようになっている。[本稿に合うように数字を改訂]

(31)「ワインを友人が 3 人……」と「ワインを友人が 3 本……」の説明

(30b)において、「ワイン」と「3 人」の間の経路数は 6 なので、「ワイン」が「3 人」の照合子となり、両者には同一指標が振られていないので、この文は非文法的と判断されるが、これは事実に合致する。(30b)の構造で、「3 人」の代わりに「3 本」となった場合でも、「ワイン」は照合子となり、そして、両者に同一指標が振られることになるので、文法的と判断される。これは事実に合致する。[本稿に合うよう数字を改訂、下線は筆者]

(31)の説明は、前半部分、つまり、「ワインを友人が 3 人……」の文については正しいが、下線部分、即ち、「ワインを友人が 3 本……」の文については正しくない。というのは、石井（2007）の枠組みでは、「3 本」の統語的位置が V' 内の PP に支配されているからである。つまり、(32b)の構造が関係しているのである。

(32) a．ワインを友人が3本持ってきた。

b．ワイン j — P' — PPi — IP — IP — I' — た
　　|　　|　　|
　　を　　PP — PP　VP — V' — 持ってき
　　|　　|
　友人 — P'　　PP — 3本 j
　　|　　|
　　が　　ti

(32b)では、「ワイン」と「3本」の間の経路数は9なので、「ワイン」が照合子とならず、また、「友人」と「3本」の間の経路数も9で、「友人」も照合子とならない。即ち、「3本」というFQは、そもそも照合されないので、文法的とは認可されない。これは事実に合致しない。だからこそ、付加部移動が必要なのである。

本稿の考え方（FQの基底生成位置と付加部移動を加味した照合理論）で、(32a)文を分析してみよう。(33)を考察する。

(33)　ワイン j — P' — PPi — IP — IP — I' — た
　　|　　|　　|　　|
　　を　　tj　　PP　VP — V' — 持ってき
　　／　＼　　|
　友人 — P'　3本 j　　ti
　　|
　　が

(33)において、VPの補部にあったPPは前置されてIPに付加される。このとき、FQ「3本」は一緒に前置されるが、その後、「を」句のPP付加部から「が」句のPP付加部へ移動している。この2つの移動で、(32a)文が実現する。ここで、照合作業を行うのである。すると、「ワイン」と「3本」の間の経路数は、6となるので、照合子条件を満たし、また、同一指標が振られているので、照合条件をも満たす。従って、正しく文法性が判断できる。これは、付加部移動が行われていることを証明するのである。

3.2.　FQのPP内移動

本稿では、FQの基底生成位置を提案したのだから、「NP＋P＋FQ」の基本形、即ち、「男が3人」や「ワインを3本」が、FQの基本的な形となることがわかる。従って、そのほかの形、「男3人」や「3本ワイン」などの表現は、派生形であると考える。

その際、「男3本」や「3人ワイン」は不自然であることから、「3人」や「3本」というFQは、それぞれに関連する名詞句「男」や「ワイン」を含むPP内で移動すると考えるのが、論理的である。その移動は、それぞれ(34)(35)のような形になると判断できる。

(34) a．〈NP＋P＋FQ→NP＋FQ＋P〉型移動

b．
```
FQi   NP
 |     |
 P' — P' — PP — IP
 |          |
 が         ti
```

(35) a．〈NP＋P＋FQ→FQ＋NP＋P〉型移動

b．
```
NP          FQi
 |           |
 P' — PP — PP — IP
 |    |
 が   ti
```

ちなみに「3人の男が」の表現は、(36)の構造を持つ。これは「3人の」はFQではないので、移動現象ではない(14)。

(36)
```
NP   Q
 |   |
 P' — PP — IP
 |
 が
```

4. 改訂照合理論による「は」文の検証

4.1. 「3人の男は」文の検証

本稿の2章で提案したFQの基底生成位置と3章で提案した「付加部移動」と「PP内移動」を基盤として、石井（2007）の「照合子条件」と「照合条件」を適用すると、FQを用いた「は」文の統語的振る舞いを説明できる。

まず、非遊離数量詞を用いた文を分析してみよう。これはFQではないので、この構造のまま認可される。これは事実に合致する。

(14) (35b)においてFQはPPに付加するという構造（＝付加構造）であるが、これは(36)で分かるようにPP指定部は非遊離数量詞が入る場所であることと、「3人だけ男が」など、「だけ」のような語が入る場所を要求するためである。なお、「3人」と「男」の間にポーズがあることも付加構造を裏づける。

(i)
```
NP   だけ   FQi
 |    |     |
 P' — PP — PP — IP
 |    |
 が   ti
```

(37) a．３人の男は入ってきた。[＝(2a)]

b．

```
          3人の
            |
男 ― P'― PP ― CP ― CP ― C'― C
      |                    |
      は                   IP
                           △
                       入ってきた
```

4.2.　FQ と「は」が関係した文の検証

4.2.1.　「男は３人」文の検証

「３人」という FQ が主格を示している場合は、FQ が主語位置の PP 付加部に生じていると考えられるので、(38a)文の構造は、(38b)になっている。

(38) a．?男は３人入ってきた。[＝(2d)]

b．

```
男 ― P'― PP ― CP ― CP ― C'― C
      |                    |
      は          P' ― PP ― IP
                  |     |    |
                  φ    3人   I' ― た
                             |
                            VP― V' ― 入ってき
```

(38b)において、「男」と「３人」の間の経路数は８となり、「男」は「３人」の照合子にならないので、また、他の照合子となる要素がないので、「３人」は照合されず、非文法的（本文の場合、不自然である）と、正しく判断される(15)。

4.2.2.　「男３人は」文の検証

次の文を検証する。

(39)??男３人は入ってきた。[＝(2c)]

「３人」はいきなり「は」句の PP 内移動ができない。というのは、その PP 句内に基底生成していないからである。まず、IP 指定部内の PP 付加部に基底生成した FQ が、「は」句 PP 内の付加部に「付加部移動」する。その後、「PP 内移動」をすると、「男３人は」の句が派生する。

この派生は、同じ要素を２回移動させた結果であるが、一般に生成文法では、次の(40)が言えるので、(39)文の容認度が落ちるのである。

---

(15) 「男は何人入ってきたの？」に対する文としては、(38a)は文法的と言える。これは、「は」句の PP の付加部へ、FQ が付加部移動した結果と考えられる。

(40) α移動制限[16]

いかなる要素も2回以上移動すると、文法的容認度が落ちる。

2回以上であれば、移動回数と容認度は反比例する。

(40)により、(38a)文の容認度と(39)文の容認度には差があり、(39)文のほうが、更に不自然なのである。

4.2.3. 「3人男は」文の検証

更に、次の文を検証する。

(41)?? 3人男は入ってきた。[＝(2b)]

(41)においても、まず、付加部移動が起こり、次にPP内移動が起こった結果、「3人男」という構造が出来上がる。従って、(39)の場合と同様、容認度は(38a)文より低下するが、これは事実に合っている。

5. まとめ

本稿では、石井（2007）を発展させ、更に原理的説明力を持つようにするために、FQの基底生成位置を提案と、「付加部移動」と「PP内移動」の2つの移動操作原理の提案を組み合わせ、「改訂NP＝FQ照合理論」を構築し、石井（2007）が説明できなかった「は」句内に起こるFQの統語的振る舞いを、分析することに成功した。

最後に、次の観察結果を挙げておきたい[17]。

(42) a. ?男は3人入ってきた。

b. *男は3人が入ってきた。

c. 男が3人は入ってきた。

(43) a. 女は5人、男は3人、入ってきた。

b. 女が5人、男が3人、入ってきた。

c. *女は5人、男が3人、入ってきた。

d. *女が5人、男は3人、入ってきた。

---

(16) 生成文法では、文法の文法たる「エコノミー原理」が提唱されている。つまり、文法はコストをかけない方向に動くということであるが、このα移動制限もエコノミー原理の帰結に他ならない。

なお、(33)の構造では、VP補部にあったPPが移動し、それからPP付加部にあったFQが移動した形なので、同じ要素の2回の移動ということには当たらないので、「ワインは友人が3本持ってきた」という文の容認度が下がらないのである。

(17) (2)と同じインフォーマントの見解である。しかし、(43d)は(43c)よりも容認度は高いと判断する別のインフォーマントもいる。これは、(43d)における「は」が対比の文脈で用いられる助詞と感じることが原因していると思われるが、この現象に関する原理的説明も、今後の研究課題としたい。

(44) a．店を3軒回った。

b．?店は3軒回った。

c．*店で3軒飲んだ。

(42a)は、本稿で提案した改訂照合理論で説明可能で、また、(42b)においては、「が」の統語的位置が存在しない、あるいは、「が」の補部に要素が入っていないため、非文法的であると正しく判断できる。しかし、(42c)は文法的であることが、説明できない。

また、(43a, b)が、改訂照合理論でどのように説明できるかも未知数であるし、そして、「は」と「が」が混在する（43c, d）文は何故容認されないのかが、統語的に説明できない。

さらに、(44a)と(44b)は、同改訂理論で説明可能であるが、(44c)に同理論を適用すると、容認度が(44b)と同じになるのだが、事実は、(44c)のほうが、容認度が低いと思われる。

以上の統語現象に対する原理的説明は、今後の研究に委ねたい。

参　考　文　献

石井隆之（2006）「不変化詞の統語的位置と情報構造」『生駒経済論叢』3巻3号、1-20. 近畿大学経済学会。

石井隆之（2007）「日本語遊離数量詞の統語的振舞と照合理論」『言語文化学会論集』29号、37-58.

石井隆之（2008）「遊離数量詞の統語的振る舞いに関する一考察」『近畿大学英語研究会紀要』1号、137-150.

Fillmore, Charles J. (1968) "The Case for Case". In Bach and Harms (Ed.): Universals in Linguistic Theory. New York: Holt, Rinehart, and Winston, 1-88.

小泉保（1994）「Xバー理論と格理論の欠陥―中島氏の反論に答える」.『言語』Vol. 23. No. 11. pp. 92-97.

Lasnik, H. and M. Saito (1992) *Move Alpha: Conditions on Its Application and Output*. MIT Press.

町田健（2000）『生成文法がわかる本』研究社出版。

松浪有、池上嘉彦、今井邦彦（編）（1983）『大修館英語学事典』大修館書店。

三原健一（1994）『日本語の統語構造　生成文法理論とその応用』松柏社。

三原健一（1998）『生成文法と比較統語論』くろしお出版。

三原健一（1999）「統語論　生成文法」。西光義弘（編）『日英語対照による英語学概論増補版』pp. 97-136.

三上章（1960）『象は鼻が長い―日本文法入門』くろしお出版。
毛利可信（1954）『語順』研究社出版。
中島平三・池内正幸（2005）『明日に架ける生成文法』「第 4 章 空範疇」65-67. 開拓社。
Reinhart, T (1976) "The syntactic domain of anaphora," Unpublished Ph.D. dissertation, MIT.
瀬田幸人（1994）「これが〈Xバー理論〉だ」、『言語』Vol. 23. No. 3. pp. 34-43.
竹沢幸一・John Whitman（1998）『格と語順と統語構造』研究社出版。
田窪行則他編（1998）『言語の科学 6　生成文法』岩波書店。
田窪行則・稲田俊明・中島平三・外池滋生・福井直樹（1998）『生成文法』岩波書店。